



レプリカと奇跡

脱神話化と脱医学化に向けて

堀 忠 [著]

聖書に登場するレプリカとは何を指していたのか。この語はその後のキリスト教著作作家たちによってどのように用いられ、結果としていかにして中世から近現代に至る概念史を形成するに至ったのか。膨大な古代文献データベースを駆使して実証的な解明を試みた貴重な労作。

◆ A5判・280頁・定価5940円

無我夢中

桜美林学園の創立者・清水安三の信仰と実践

桜美林学園チャプレン会 [編著] 「自分ばかりし種になる！」

組合教会から中国宣教に派遣された清水は貧しい民衆と出会い、教育事業に乗り出し崇貞学園を開く。敗戦によりすべてを失ったが、なおも志を持続し、戦後ユニークな学園を築いた。その無我夢中で型破りな信仰と人生を活写した、現代人必読の書。

◆ A5判・228頁・定価1980円



第1章 生い立ちから洗礼まで——劣等感を越えさせる出会いと復活信仰

コラム① 大陸の聖女、と呼ばれたクリスチャン——美穂と安三の協働

第2章 同志社時代——清水安三の信仰と神学の形成

コラム② 郁子の男女共学思想と安三との協働

第3章 中国での実践——清水安三 日本と中国、一衣帯水の間に橋を架けた人

コラム③ オベルラン（オベリン）の生涯と業績——その教育、或いは社会改革

第4章 アメリカ留学時代——十字架と清水の信仰資料——清水のアメリカ時代の文章「わたしの神学観」

第5章 戦後の日本において——平和のメッセージ——桜美林学園へ

あとがき「出会い」は撮理——清水安三の「出会い」のエピソード

● 5 月刊行

古代末期・東方キリスト教論集

戸田聡著

◆ A5 判・定価 5775 円

キリスト教修道制の成立をめぐる諸研究、『エジプト人マカリオス伝』や最初のシリア語キリスト教著作家バルダイサンに関する研究と原典翻訳、著者が企図するヴェーバー『宗教社会学論集』全訳をめぐる諸論考など 27 編。



● 4 月刊行

レヴィナスの時間論

『時間と他者』を読む

内田樹著

◆ 四六判・定価 2860 円

レヴィナス思想の戦後の出発点を告げる『時間と他者』。難解をもって鳴る同書を徹底的に精読・註解することを通して、深い苦しみの時間を生き抜いたユダヤ人の〈希望の時間論〉が浮かび上がる。



● 3 月刊行

ヤバい神

不都合な記事による旧約聖書入門

トーマス・レーマー著・白田浩一訳 ◆ 四六判・定価 2420 円

旧約聖書の神はなぜ横暴で残酷に書かれているのか。そんな記述をどう解釈すべきか。多くの人が躓くテキストを旧約学の第一人者が取り上げ、それらの表現の意味と理由を考察し、愛と解放の真の神の「人柄」に迫った異色作。



● 3 月刊行

死と命のメタファ

キリスト教贖罪論とその批判への聖書学的応答 ◆ A5 判・定価 2970 円

浅野淳博著

聖書のメタファが語る、キリストの死に至る生き様の真の意味を解明し、それを今日いかなる語り方で伝えるかを考える。



雨宮栄一著

反ナチ抵抗運動とモルトケ伯

〔仮題〕

「クライザウ・サークル」と呼ばれる反ナチ・グループの中心人物としてゲンエタポに逮捕され刑死した法律家モルトケ伯の評伝。著名な元帥の甥の孫であり、広大な領地を所有するユンカーだった伯が、反ナチの思想と行動に至るプロセスを丹念に追う。著者の遺作。

四六判・予価2700円

松本宣郎著

初期キリスト教の世界

ローマ帝国史の視点から初期キリスト教史研究の地平を精力的に拡大してきた著者の、研究史的回顧を含む11の論考・講演を収録。地中海世界に生きた人々の心性、職業労働観、教会の営みなどをめぐり、多岐にわたる論点が浮かび上がってきて興味尽きない。

四六判・予価3500円

ジャン・カルヴァン著／森川甫・吉田隆訳

共観福音書註解 下

マタイ・マルコ・ルカの三福音書を対観しながら記された註解書。福音書の「調和」を見出そうとする改革者の情熱。上巻の刊行から36年ぶりの邦訳完結となる。

A5判・予価8500円

栗田隆子著

呻きから始まる 祈りと行動に関する24の手紙

「私にとってフェミニズムと信仰はどちらも必要なものです」と語る著者が、言葉になる以前の「呻き」としか言いようのない地点から「宗教」「信仰」として「フェミニズム」と出会う自らの生の歩みを辿る。話題を呼んだ『ほそほそ声のフェミニズム』に次ぐ待望の第二作目。

四六判・予価2500円

● 6月に出た本と雑誌

フランソワ・トレティエーニの神論

その神学的内容とスコラ的方法論

青木義紀著

〔大森講座36〕



17世紀のプロテスタント正統主義・スコラ主義の代表的神学者トレティエーニをとりあげ、宗教改革の偉大な発見を後代に継承する重要な結節点として彼を位置づけると共に、生涯を概観し、その神学思想の中でも特に神論に焦点を当てて再評価を試みる。

◆ 四六判・定価1430円

福音と世界

◆ 定価660円

7月号 空になることの革命

寄稿者：白石嘉治、宮本久雄、池上俊一、後藤里菜、佐藤紀子、五井健太郎／新連載 山下壮起／好評連載 C・J・サンダース&A・ヤーバー、山口陽一、山崎ランサム、和彦、宇井志緒利、田崎英明、村澤真保呂、勝村弘也、有住航

●もうすぐ夏、ホラー映画の季節です。「いつもホラーばかりじゃないか」とツッコミが入りそうですが、わたしは多分、ホラーをホラーとして観ていないのだと思います。怖いとされるものが過剰になりすぎて別のものに転化してしまう瞬間を求めている節がありますし、その意味では人一倍怖がりなのかもしれません。そして、そんなわたしが人生でもっとも怖かったホラー映画が『霊的ポリシエヴィキ』です。二〇一八年に公開された高橋洋監督のこの映画を、わたしは劇場で一回、自宅で一回観たのですが、正直もう観たくありません。怖すぎるからです。この映画では、廃墟に集った人びとが自身の体験した怪異を語り合うという「実験」を描写していきます。ただ、多くの場合そうした語りには再現映像が入るものですが、この映画にはそれがありません。何が見えてしまったのかを観客の想像力に委ねることで、観客は画面から距離を取ることができず、いつしか自らもその参加者であるかのように感じはじめるのです。いや、あるいは本当に参加してしまっているのかもしれない。一回目に劇場で観たとき、横に座っていた人から終映後にポツリと尋ねられました。「観てるとき、わたしの右足掴みました？」と。わたしの席はその人

の左でしたし、その人の右はただの壁なのです。また二回目に自宅で観たとき、途中でトイレに立った同居人が半泣きで呼ぶので駆けつけると、「トイレの扉が勝手に開いた」というのです。古い家とはいえ、それまでになかった現象が突然……。一体、あの出来事は、あの「実験」は、あの映画は何だったのでしょうか。(堀)

●いま話題の『ヤバイ神——不都合な記事による旧約聖書入門』の刊行を記念して、去る六月二五日、訳者の白田浩一さんと気鋭の旧約聖書学者・日高貴士耶さんによるオンライン・トークイベントが行われました。冒頭に著者トーマス・レマーさんから日本の読者に向けたビデオメッセージが流されたほか、日高さんは留学先のジュネーブからライブで参加。また視聴者の感想が随時チャットで書き込まれるなど、オンラインのメリットを存分に生かした楽しい充実した内容となりました。現在はユーチューブ「いのフェスチャンネル」キリスト教&エンタメ」で動画を視聴できますのでぜひご覧下さい。ライブ時は六十数名の参加でしたが、視聴数は現在七〇〇近くまで伸びています。本の注文ももちろんたくさんいただいています。今さらですが、紙の書籍とネット媒体との協力の可能性を大いに実感し、励まされました。(小林)

福音と世界

2022年
8

A5判・80頁・定価660円・送料70円
年間予約購読料(送料共) 8760円

特集・「集まり」以後

「秘密」の声を引き継ぐ——アセンブリと(不)可視性の政治学——清水知子
 ポスト・コロナの民主主義、ネグリルハートとハリバル——太田悠介
 アセンブリとプラットフォーム——水嶋一憲
 来るべき集まりのために——中井亜佐子
 コロナ禍と戦争のせまなかに(わたしたち)をつなぐ——
 仮面を脱ぐ——

「コミュニケーション主義」の招待状——笹塚「コミュニケーション

「善意」のはざままで——セクシアルマイノリティへの言葉を受けて——白井一美

ウクライナ戦争と軍拡、そしてドイツの教会——川田洋一

「好評連載より」

◆フッド・スビリチュアルズ2……山下壮起

◆教会とけるマイクログレシヨン4 サンダース、ヤンパー

◆「日本的キリスト教」を読む7……山口陽一

◆新約釈義 ルカ福音書8……山崎ランサム和彦

◆アジアの草の根 平和の証し人 12 宇井志緒利

◆間隙を思考する 非同時代性のために 17 田崎英明

◆古代イスラエル文学史序説 18……勝村弘也

◆霊性のエゴロジーあるいは「マニマニア」19 村澤真保呂